大学生の性に関する態度と自己同一性および自尊感情との関連

久野（クノ）　孝子（タカコ）*　舘（タチ）　英津子（エツコ）*　小笠原昭彦（オガサワラアキヒコ）*
下方（シモカタ）　浩史（ヒロシ）[2*]　山口（ヤマグチ）　洋子（ヨウコ）*

目的　近年の青少年の性行動は，若年化，活発化の傾向にあり，また，人工妊娠中絶実施率は依然高値である。そこで，今回，青少年の性に関する問題意識を調査するとともに，性行動とくに避妊に対する態度を心理学的視点から解明することを主な目的とした。

方法　愛知県下にある4年制大学（4校）の18～23歳の男女学生計710人（男子；234人，平均年齢±標準偏差20.2±1.1歳，女子；460人，平均年齢±標準偏差19.5±1.1歳，年齢未記入および無効回答9人）を対象に2000年4～7月に調査を実施した。自己同一性についての「自分の確立」尺度，ローゼンバーグ自尊感情測定尺度（以下：自尊感情尺度）および性に関する態度・行動などについて，無記名自記式の質問紙を用いた。「自分の確立」尺度は，アイデンティティの基礎（以下：「基礎」）とアイデンティティの確立（以下：「確立」）を下位尺度とし，各尺度得点を算出後，年齢および学校･学部を調整しながら，性の項目との関連を比較検討した。

成績　「自分の確立」尺度における平均合計得点±標準偏差は男子55.3±9.2点，女子52.2±9.3点であり，自尊感情尺度の平均得点±標準偏差は男子27.2±5.5点，女子25.7±5.2点であった。また両尺度間の相関係数は，男女とも高く，有意であった。

自分の性別に対する認識については，男女とも多くの者が肯定的に捉えており，「伝統的性役割」観に対しては，否定的意見が多くみられ，中でも女子に顕著であった。

性交に対する意志決定では，男子は82.4%，女子では69.5%の者は相手からの性交要求に応じると答えた。避妊に対する態度では，ほとんどの者がその必要性は認識していたものの，その他の構成要素においては，十分確立されていなかった。最近1年間の性交経験率は男子68.3%，女子48.2%であり，そのうちいつも避妊をしている者は男子50.6%，女子58.2%であった。

避妊に対する態度と「自分の確立」尺度との関連では，男女とも「コミュニケーション能力」，「習得能力」，「入手能力」において，「できる」と回答した者の方が尺度得点が高かった。とくに男子では，「自分の確立」尺度の合計得点，「確立」得点，女子では合計得点，両下位尺度得点に有意差が認められた。また自尊感情尺度では，男子では「習得能力」，女子は「コミュニケーション能力」，「習得能力」において有意差が確認された。しかし，両尺度とも実際の避妊行動との間には，有意差は認められなかった。

結論　避妊に対する態度と避妊行動との間にずれがみられた。また，避妊に対する態度と自己同一性および自尊感情との関連においては，有意な関係が確認された。

Key words：性教育，自己同一性，自尊感情，大学生

I　緒　　言

近年，性情報の氾濫や性規範の多様化など性を取り巻く環境の変化は著しく，また青少年の性行動の若年化，活発化が報告されている[1~2]。このような状況やエイズ等の性感染症の増加に鑑み，性教育の必要性や充実が指摘されているにも関わらず，若年層の人工妊娠中絶実施率は依然高値である[3]。これらの背景要因の一部として，不確かあるいは不十分な性知識，生徒・学生という社会

* 名古屋市立大学看護学部
2* 国立長寿医療研究センター疫学研究部
連絡先：〒467-8601 名古屋市瑞穂区瑞穂町字川澄1番地　名古屋市立大学看護学部　久野孝子

的立場や経済的問題，同一性混乱などの心理的要因が考えられる。中でも多くの臨床家や専門家が，自己同一性の低さと人工妊娠中絶との関連性を報告している[4~8]。

しかしわが国では，性とくに性行動と心理的要因との関連を実証的に検討した研究は少数である。したがって，まずは両者の関連を多角的・系統的に解明した上で，青少年自らが保健行動を導けるような教育支援の方法を検討することが必要である。

著者らは，前回，高校生を対象に自己同一性と避妊に対する態度との関連について調査を実施した[9]。その結果，同一性が確立されている者ほど，好ましい避妊行動がとれる可能性が示唆された。そこで本研究においては，対象年齢を拡大し，また実際の性行動に関する項目も追加して同一性との関連を検討した。さらに最近，保健行動との関連で注目されている自尊感情[10~15]を新たな変数として加え，前回の研究結果のさらなる一般化と，また性と心理的変数との関連を分析することを主な目的とした。

Ⅱ　研究方法

1.　調査対象および期間

愛知県下にある4年制大学（4校）の医療・教員養成系の学部・学科に在学する18～23歳の男女学生計710人を対象に，2000年4～7月に調査を実施した。回収率は100％で，白紙回答は3部であった。

本研究では未婚の学生に着目するため，既婚者5人および性別未記入者1人は除外した。その結果，分析対象は男子234人（33.4％），女子467人（66.6％）で，年齢分布については表1に示したとおりである。

また「自分の確立」尺度およびローゼンバーグ自尊感情測定尺度で，欠損値を有する回答は分析から除外した。

2.　調査内容および方法

自己同一性についての「自分の確立」尺度[16]，ローゼンバーグ自尊感情測定尺度（星野訳，以下：自尊感情尺度）[17]および性に関する態度（主に避妊に対する態度を意味する）・行動などを内容とする無記名自記式の質問紙を用いた。「自分の確立」尺度は，アイデンティティの基礎（以下：「基礎」）とアイデンティティの確立（以下：「確立」）を下位尺度とする。

表1　対象者の年齢分布

人数（％）

年齢（歳）	男子	女子
18	23（ 9.8）	107（ 22.9）
19	15（ 6.4）	118（ 25.3）
20	100（ 42.8）	136（ 29.1）
21	78（ 33.3）	88（ 18.8）
22	15（ 6.4）	11（ 2.4）
23	3（ 1.3）	0（ 0.0）
無回答	0（ 0.0）	7（ 1.5）
計	234（100 ）	467（100 ）

調査の実施に当たっては，調査校に赴き，目的，自由意志による参加，個人情報の守秘について説明し，同意が得られた者のみ回答してもらった。回答者のプライバシーを保護するため，回答にあたっての注意事項を説明すると同時に，質問紙の回収は個別の封筒に入れて行った。

3.　分析方法

データの集計および統計処理にはSAS release6.12[18]を使用した。「自分の確立」尺度20項目および自尊感情尺度10項目に関して，クロンバッハα係数を求め信頼性を確認した後，尺度得点（4件法）を算出した。また尺度得点の性差はt検定，年齢との関係は一般線形モデルを用いたトレンドの検定，学校・学部差は分散分析を実施した。さらに両尺度間の相関係数を求めた。性に関する態度・行動は男女別に集計し，2群間の差を示す際に3つ以上の選択肢がある場合は，1つの選択肢とそれ以外をまとめ2×2の分割表を用いて，自由度1のカイ2乗検定を行った。その後，年齢，学校・学部を調整した上で避妊に対する態度と「自分の確立」尺度および自尊感情尺度得点をt検定により比較した。変数の調整は共分散分析の手法を用いて行った。

Ⅲ　結　　果

1.「自分の確立」尺度，自尊感情尺度および両尺度の関連性

1）「自分の確立」尺度，自尊感情尺度について

記入に不備がある者を除外し，クロンバッハα

係数を求めたところ，「自分の確立」尺度においては682人（男子227人，女子455人）が対象となり，0.87であった。また自尊感情尺度では，689人（男子229人，女子460人）に対して0.84であった。

男女別の尺度得点の平均および性差は表2のとおりである。「自分の確立」尺度では，合計得点と「基礎」得点に，また自尊感情尺度においても有意な性差が認められた（$P<0.001$）。

男女別での年齢による変化（表3）は，「自分の確立」尺度では女子の合計得点と「確立」得点で年齢が高くなるほど尺度得点が高くなっていた（P trend<0.01）。

学校・学部差（表4）に関しては，「自分の確立」尺度では，女子は合計得点（$P<0.001$），「基礎」得点（$P<0.001$），「確立」得点（$P<0.05$）において，男子は「基礎」得点（$P<0.01$）に有意な差が認められた。自尊感情尺度では，女子に有意差が確認された（$P<0.05$）。

2）「自分の確立」尺度と自尊感情尺度との関連性

表5に示したように，男女ともすべての尺度の間で強い相関関係がみられた（$P<0.001$）。中でも「自分の確立」尺度の合計得点と自尊感情尺度得点との間に高い相関係数が得られた。

2.　性に関する態度・行動

1）　自分の性別に対する認識，性役割観について

自分が「男または女に生まれたこと」について，男子では83.3％が「よかった」と回答しているのに対し，女子は42.0％であった。「どちらかといえばよかった」と回答した者は，男子12.8％，女子39.0％であり，性差が認められた（$\chi^2=50.54$, df$=1$, $P<0.001$）。

また「男は外で働き，女は家庭にいて家事に専念する」という意見に対して，「そう思う・どちらかといえばそう思う」と答えた者は，男子40.6％，女子20.8％であった。一方「どちらかといえばそう思わない・そう思わない」との回答は，男子55.6％，女子76.7％であり，賛成意見に比べて多く，女子に顕著であった（$\chi^2=30.82$, df$=1$, $P<0.001$）。

2）　性行動および避妊に対する態度について

「親しく交際している異性の友人がいると仮定して，その人から性交を求められたら」という設問に対し，「性交に応じる」（男子67.9％，女子

表2　「自分の確立」尺度および自尊感情尺度得点と標準偏差（SD）―性差―

性別	「自分の確立」尺度			自尊感情尺度得点
	合計得点	「基礎」得点	「確立」得点	
男子	55.3(9.2)	27.5(5.9)	27.8(5.4)	27.2(5.5)
女子	52.2(9.3)	25.1(5.5)	27.0(5.5)	25.7(5.2)
	***	***		***

*** $P<0.001$

表3　「自分の確立」尺度および自尊感情尺度得点と標準偏差（SD）―年齢差―

年齢	男子				女子			
	「自分の確立」尺度			自尊感情尺度得点	「自分の確立」尺度			自尊感情尺度得点
	合計得点	「基礎」得点	「確立」得点		合計得点	「基礎」得点	「確立」得点	
18	51.4(1.9)	24.8(1.2)	26.7(1.1)	24.3(1.1)	49.6(0.9)	23.4(0.5)	26.1(0.5)	24.9(0.5)
19	54.6(2.4)	25.4(1.5)	28.6(1.5)	26.8(1.4)	52.3(0.8)	24.8(0.5)	27.5(0.5)	25.9(0.5)
20	54.7(0.9)	27.1(0.6)	27.7(0.6)	27.1(0.5)	52.4(0.8)	25.9(0.5)	26.5(0.5)	25.6(0.5)
21	57.4(1.0)	29.3(0.7)	28.2(0.6)	28.2(0.6)	54.0(1.0)	26.3(0.6)	27.8(0.6)	26.4(0.6)
22	52.7(2.4)	26.3(1.5)	26.9(1.4)	25.6(1.4)	57.8(2.9)	26.1(1.6)	30.8(1.7)	26.8(1.6)
23	63.3(5.2)	30.7(3.3)	32.7(3.1)	31.3(3.1)	—	—	—	—
p trend	ns	ns	ns	ns	**	ns	**	ns

** $P<0.01$

表4　「自分の確立」尺度および自尊感情尺度得点と標準偏差（SD）—学校・学部差—

学校・学部	男子				女子			
	「自分の確立」尺度			自尊感情尺度得点	「自分の確立」尺度			自尊感情尺度得点
	合計得点	「基礎」得点	「確立」得点		合計得点	「基礎」得点	「確立」得点	
A	53.3(4.6)	25.3(2.9)	28.0(2.7)	26.8(2.7)	52.7(1.8)	24.5(1.1)	28.1(1.1)	26.0(1.1)
B	52.5(2.7)	24.5(1.7)	28.0(1.6)	25.5(1.6)	50.9(0.9)	24.2(0.5)	26.5(0.5)	25.4(0.5)
C	—	—	—	—	53.0(0.7)	25.4(0.4)	27.6(0.4)	26.1(0.4)
D	54.6(2.5)	24.6(1.5)	29.5(1.5)	25.3(1.5)	49.8(1.7)	24.0(1.0)	25.8(1.0)	23.9(1.0)
E	56.0(0.7)	28.3(0.4)	27.9(0.4)	27.7(0.4)	54.8(0.9)	27.4(0.5)	27.5(0.6)	26.5(0.5)
F	51.3(1.9)	24.8(1.2)	26.5(1.2)	25.1(1.2)	46.9(1.5)	22.2(0.9)	24.7(0.9)	23.7(0.9)
ANOVA	F=1.65 ns	F=3.81 **	F=0.62 ns	F=1.83 ns	F=5.19 ***	F=6.90 ***	F=2.47 *	F=2.51 *

* $P<0.05$, ** $P<0.01$, *** $P<0.001$

表5　「自分の確立」尺度と自尊感情尺度との相関係数

尺度		「自分の確立」尺度			自尊感情尺度得点
		「基礎」得点	「確立」得点	合計得点	
「自分の確立」尺度	「基礎」得点		0.32	0.83	(男子) 0.59
	「確立」得点	0.44		0.80	0.62
	合計得点	0.85	0.85		0.74
自尊感情尺度得点		0.64 (女子)	0.67	0.77	

1)　関係数はすべて $P<0.001$
2)　対角線の上側は男子，下側は女子での相関係数を示す

35.5%），「どちらかといえば応じる」（男子14.5%，女子34.0%）の順に多く，「応じない」と答えた人は少数であった。性交に「応じない」との回答者以外に避妊について質問したところ，男子85.4%，女子95.5%が避妊は「必要・どちらかといえば必要である」と思っていた。また避妊のイニシアティブはほとんどの対象者が「(男女)両方」と回答した。

次に「相手と避妊について話し合えるか（以下「コミュニケーション能力」）」聞いたところ，男子70.1%，女子69.1%が「できる（多分を含む）」と答え，「性交を経験する前に自分で避妊の知識・技術を習得できるか（以下「習得能力」）」では，男子85.1%，女子62.8%が「できる（多分を含む）」と回答した。また「避妊具を自分で入手することができるか（以下「入手能力」）」については，男子は97.4%が「できる（多分を含む）」と答えたのに対し，女子は62.1%と低かった（$\chi^2=100.91$, df=1, $P<0.001$）。さらに「相手もしくは自分が避妊していなかった場合（以下「危機対処能力」）」，女子は64.9%の者が「性交をやめる（多分を含む）」のに対し，男子は40.6%であった（$\chi^2=37.46$, df=1, $P<0.001$）。

「現在妊娠したら」という設問には，女子の34.7%が「産む（多分を含む）」，男子では35.0%が「産むようにいう（多分を含む）」と答えたが，男女とも「わからない」と回答した者が多かった（表6）。

3)　性行動について（表7）

最近1年間の性交経験の有無は，男子は68.3%，女子では48.2%が「ある」と回答しており，その際「いつも避妊をしていた」者は，性交経験のある者のうち男子50.6%，女子58.2%と約半数であった。

表6　性行動および避妊に対する態度

人数（%）

項目		男子	女子
避妊に対する潜在的準備[1]	必要	169(72.5)	395(89.2)
	どちらかといえば必要	30(12.9)	28(6.3)
	どちらかといえば必要ない	1(0.4)	2(0.5)
	必要ない	5(2.1)	0(0.0)
	わからない	2(0.9)	5(1.1)
	無回答	26(11.2)	13(2.9)
コミュニケーション能力	できる	101(43.2)	178(38.1)
	多分できる	63(26.9)	145(31.0)
	多分できない	28(12.0)	78(16.7)
	できない	13(5.6)	13(2.8)
	わからない	16(6.8)	35(7.5)
	無回答	13(5.6)	18(3.9)
習得能力	できる	101(43.2)	110(23.6)
	多分できる	98(41.9)	183(39.2)
	多分できない	16(6.8)	71(15.2)
	できない	2(0.9)	7(1.5)
	わからない	15(6.4)	86(18.4)
	無回答	2(0.9)	10(2.1)
入手能力	できる	191(81.6)	156(33.4)
	多分できる	37(15.8)	134(28.7)
	多分できない	1(0.4)	128(27.4)
	できない	3(1.3)	21(4.5)
	わからない	1(0.4)	24(5.1)
	無回答	1(0.4)	4(0.9)
危機対処能力	性交をやめる	32(13.7)	169(36.2)
	多分性交をやめる	63(26.9)	134(28.7)
	多分性交する	50(21.4)	78(16.7)
	性交する	52(22.2)	17(3.6)
	わからない	36(15.4)	67(14.3)
	無回答	1(0.4)	2(0.4)
妊娠時の対応	産む・ように言う	30(12.8)	57(12.2)
	多分産む・ように言う	52(22.2)	105(22.5)
	多分産まない・ように言う	47(20.1)	106(22.7)
	産まない・ように言う	44(18.8)	76(16.3)
	わからない	60(25.6)	122(26.1)
	無回答	1(0.4)	1(0.2)

1)　問8で性交に応じないと回答した者は除外する

3.　避妊に対する態度・行動と「自分の確立」尺度および自尊感情尺度との関連（表8）

結果1.に示したとおり，「自分の確立」尺度および自尊感情尺度を年齢，学校・学部間で検討したところ，有意差が認められた。したがって，両尺度と性の項目との分析においては，それらを調整した上で検定した。

避妊に関する項目においては，性行動の特殊性や確実な避妊という観点から4件法中「できる」と回答した者とそれ以外とを比較した。その結果，男女とも「避妊に対する潜在的準備」においては有意差は認められなかったが，「コミュニケーション能力」，「習得能力」，「入手能力」では男女とも「できる」と回答した者の方が尺度得点が高かった。中でも男子では合計得点，「確立」得点，女子では合計得点，両下位尺度得点に有意差が認められた。また自尊感情尺度得点においては，男子は「習得能力」，女子では「コミュニケーション能力」と「習得能力」に有意差が認められた（P値は表8参照）。

実際の避妊行動では「いつもしている・していた」と回答した者の方が，「ときどき」，「していない・なかった」との回答群に比べ得点が高かったものの，有意差は認められなかった。

Ⅳ　考　　察

1.「自分の確立」尺度，自尊感情尺度および両尺度の関連性

著者らの先行研究[9]において，高校生の自己同一性の確立が下山[16]の大学生を対象とした結果より明らかに高かった。これは，高校生がまだ青年期の課題（危機）に直面していないため，みかけ上得点が高くなったのではないかと推測した。しかし，今回，大学生を対象に同じ調査を実施したところ，高校生より得点が有意に高かった。現時

表7　性行動

人数（%）

性別	性交経験 ある				なし	無回答
	避妊 いつもしている・いた	ときどき	しない・しなかった	無回答		
男子	81(34.6)	53(22.6)	16(6.8)	10(4.3)	64(27.4)	10(4.3)
女子	131(28.1)	71(15.2)	20(4.3)	3(0.6)	225(48.2)	17(3.6)

表 8　性に対する態度・行動と「自分の確立」尺度および自尊感情尺度得点（標準誤差）との関連

項目		男子				女子			
		「自分の確立」尺度			自尊感情尺度得点	「自分の確立」尺度			自尊感情尺度得点
		合計得点	「基礎」得点	「確立」得点		合計得点	「基礎」得点	「確立」得点	
避妊に対する潜在的準備	必要	56.2(1.6)	26.4(1.0)	29.6(1.0)	27.3(1.0)	52.4(0.8)	24.9(0.5)	27.3(0.5)	25.6(0.5)
	必要ない	58.4(2.3)	28.4(1.4)	29.9(1.4)	28.6(1.4)	52.4(1.8)	24.2(1.1)	28.0(1.1)	26.4(1.0)
コミュニケーション能力	できる	57.5(1.8) **	26.2(1.2)	31.2(1.1) ***	27.6(1.1)	54.5(0.9) ***	25.7(0.6) **	28.7(0.6) ***	26.4(0.5) **
	できない	54.0(1.8)	25.6(1.2)	28.1(1.1)	26.7(1.1)	50.5(0.9)	24.2(0.5)	26.3(0.5)	25.0(0.5)
習得能力	できる	57.6(2.0) ***	27.1(1.3)	30.5(1.2) ***	28.1(1.2) **	54.7(1.1) **	26.0(0.6) *	28.6(0.7) **	26.6(0.6) *
	できない	53.4(1.9)	25.5(1.2)	27.9(1.1)	25.8(1.1)	51.4(0.9)	24.5(0.5)	26.7(0.6)	25.1(0.5)
入手能力	できる	56.5(1.7) **	26.3(1.1)	30.0(1.0) *	27.4(1.0)	54.3(1.0) **	25.8(0.6) *	28.3(0.6) *	26.3(0.6)
	できない	52.1(1.9)	24.6(1.2)	27.6(1.2)	25.6(1.2)	51.9(0.8)	24.7(0.5)	27.1(0.5)	25.3(0.5)
危機対処能力	性交をやめる	54.4(2.2)	24.9(1.4)	29.2(1.3)	25.7(1.4)	52.4(1.0)	24.6(0.6)	27.7(0.6)	25.3(0.6)
	性交する	54.5(1.7)	25.3(1.1)	29.1(1.0)	26.7(1.0)	52.4(0.9)	25.3(0.5)	27.2(0.6)	25.5(0.5)
避妊行動	している・いた	58.1(1.6)	28.7(1.0)	29.5(1.0)	27.5(0.9)	52.8(1.1)	25.4(0.7)	27.3(0.7)	26.5(0.7)
	ときどき，していない・なかった	57.3(1.7)	28.7(1.1)	28.9(1.1)	27.5(1.0)	51.9(1.3)	24.9(0.8)	27.1(0.8)	26.1(0.7)

1)　すべての項目間の比較は共分散分析の手法を用い，年齢，学校・学部を調整した上でt検定により行った

* $P<0.05$，** $P<0.01$，*** $P<0.001$

点では，本尺度を用いた先行研究が他にないため，以上の結果のみから青少年の自己同一性の確立について考察するには限界がある。今後，同一性の確立状態を測定する他の尺度との関連等を考慮し，さらに検討を重ねる必要がある。

今回は，自尊感情についても調査を実施した。大学生を対象に自尊感情を測定した先行研究[19~21]との比較では，同様の結果が得られた。また同一性と自尊感情との関係については，先行研究[22~24]において有意な関連性が指摘されている。本研究においても「自分の確立」尺度と自尊感情尺度との間に強い相関関係がみられたことから，青年期の発達課題である自己同一性の確立と自尊感情の関係が確認された。

2.　性に関する態度・行動

自分の性別に対する認識は，男子ではほとんどの者が「よかった」と回答したが，女子は半数以下であった。前回の高校生[9]との比較は，選択肢が異なるため厳密には困難であるが，男女とも大学生になるにつれ自分の性別を肯定する割合が増加した。

また「伝統的性役割」観については，男女とも否定が肯定に比べ多く，中でも女子にその割合が多かった。これは2000年の性教育協会の全国調査[1]とほぼ同様の結果であったが，高校生の調査[9]と比較すると「わからない」や無回答が少数となり自分の意見をより明確に述べていた。大学生は自分の将来や生き方を具体的に考える時期であり，社会環境や価値観が多様化している現代において，青年期の発達課題である同一性の確立とどのような関連性を示すのか，引き続き検討課題としていきたい。

次に「親しく交際している異性の友人に性交を求められたら」という設問に対して，高校生[9]に比べ，男女とも多くの者が性交に応じると回答していた。とくに，大学生になると，女子にその傾向が顕著であった。避妊に関しては，ほとんどの者が「必要である」と思っていた。先行研究[9]と同様に，避妊を成立させるための5つの構成要素（能力）を設けたが，今回は「購入能力」を「入手能力」と変更した。その理由として，避妊具が必要な場合，他人からもらうようなことも想定されるため，概念を広く，「必要な時に自ら手に入れることができる能力（入手能力）」とした。その結果,「コミュニケーション能力」,「習得能力」,「入手能力」においては，男子の方が女子に比して「できる」と答えた者の割合が高かった。これらの背景として，避妊手段のほとんどがコンドームであり，避妊のイニシアティブでは「両方」という回答が多かったものの，実際の避妊では，男性主導あるいは依存の避妊スタイルを反映しているのではないかと思われる[1,25~28]。一方「避妊の潜在的準備」,「危機対処能力」では，女子の方が「できる」と回答した者が多く，万一避妊をしなかった場合，実際問題として望まない妊娠や中絶という帰結を直接的に被るという認識によると推測される。前回の高校生の調査[9]と比べると，男子ではいくつかの項目において「できる」という態度の者が増加したが，女子では「できない」と回答する者の割合が増加した。大学生は性行動がより具体化・活発化するが，それに伴い，意識の上では「できる」と思っていた事柄が実際は「できなかった」という経験から，高校生と比較するとこのような結果になったと考えられる。また「現在妊娠したら」という設問では，積極的に出産の意志を示した者は男女とも一割程度であった。町浦[29]は10代の中絶を社会的な視点から分析し，子どもを産むための条件には妊婦の年齢，婚姻状況，妊娠と結婚の順番が関係していることを指摘している。本研究の対象者も未婚であることから，万一妊娠した場合，人工妊娠中絶を選択する可能性は低くないであろう。出産もしくは中絶に対する態度は，避妊に対する態度や自己同一性とも関連があると思われるため，今後これらの関係についても分析する必要がある。

性行動については，最近一年間の性交経験の有無に対する回答ではあったが，全国調査[1]とほぼ同様な結果が得られた。その際「いつも避妊をしている・いた」者は男女とも約半数であり，全国調査[1]より低率であった。避妊に対する態度では，男女とも多くの者が避妊は「必要である」と回答していたものの，実際の行動との間にずれがみられた。性行動は他の多くの保健行動とは異なり，相手との関係性において決定・実行されるという特性がある。すなわち，避妊に対する態度は対象者自身の回答（能力）であるが，実際の避妊行動は自分自身の要因以外に相手の避妊に対する態度などが大きく関与する。そのため，今回のよ

うに態度と行動との間にずれがみられたと推測される。本調査においても避妊の態度と併せてその根拠を自由記述法で質問したため，今後分析を予定している。

3. 避妊に対する態度・行動と「自分の確立」尺度および自尊感情尺度との関連

避妊に対する態度のうち「コミュニケーション能力」，「習得能力」，「入手能力」において，男女とも「できる」と回答した者の方が尺度得点が高く有意差が認められた。PRECEDE-PROCEED MODELをはじめとする多くの健康関連の理論やモデル[30~32]に示されるように，人が意識的に行動するあるいは行動を変容する時，その行動に対する準備（レディネス）がどれくらいできているかが重要となる。したがって，避妊に関しても，その必要性を認識し，相手と話したり，適切な知識や技術を習得するという態度が形成されなければならない。しかし，自己同一性の確立が不十分であれば，適切な意志決定や自己主張ができず，結果として望まない妊娠や人工妊娠中絶のリスクが高くなると考えられる。そこで，自己同一性の確立と避妊に対する態度との関連に着目し分析を行ったところ，いくつかの有意な関連性が認められた。このことから，先行研究[9]に引き続き同一性のような心理的変数をパラメーターとする教育支援の有用性が示唆された。

しかしながら，実際の避妊行動と自己同一性の確立との関連では有意差は認められなかった。その理由に関しては，考察の2.の部分で態度と行動のずれについて述べた要因と関連するが，実際の避妊行動は相手の同一性の状態や避妊に対する態度が大きく関与すると思われる。例えば，いかに個人の自己同一性が未確立であり，避妊に対する態度が未形成であろうと，相手がいつも避妊をすれば，結果的に双方にとって避妊が行われていることになる。しかし，これは逆の現象も考えられるため，何より個々人が自己同一性の確立や避妊に対する確固たる態度を形成する必要があると考えられる。

今後は避妊に対する態度と行動とのずれについて分析するとともに，避妊に関する相手の影響等を排除した上で，対象者本人の避妊行動と自己同一性の確立との関連を検討する必要がある。さらには，これらの科学的根拠にもとづく教育システムの検討・開発等についても研究を重ねる必要がある。

最後に本研究で使用した尺度の検討であるが，自己同一性についての「自分の確立」尺度[16]は日本で開発され，信頼性・妥当性の検討は行われいる。また著者らの先行研究[9]と比較可能であることから同様のものを使用した。一方，ローゼンバーグ自尊感情測定尺度においては，今後看護的視点のもとに検討を深めていきたいという意図から，この分野で広く使用されている[33,34]星野訳[17]を採用した。また本研究の調査対象者は，著者が依頼可能であった，都市部およびその近郊の，大学・学部で，調査日に講義を受講した学生であり，日本の大学生を必ずしも代表しているとはいえない。しかし，性という個人のプライバシーに関わる調査では，対象者の理解と協力が不可欠と思われる。このような調査が実施できたことは価値あることであり，本研究は青少年の性を理解する上で貴重な基礎資料になると思われる。

本研究は名古屋市立大学特別研究奨励費の助成を受け，実施された。

本論文を作成するにあたり，本研究の趣旨をご理解いただき，快く協力してくださった各学校の先生方，学生の皆様に深く感謝の意を表します。

（受付　'01. 5.18
採用　'02. 7.19）

文　献

1) 財団法人日本性教育協会（編集・発行）.「青少年の性行動」第5回調査報告．東京：2000.
2) 東京都幼稚園・小・中・高・心障性教育研究会．1996年調査児童・生徒の性最新版．東京：学校図書，1996.
3) 財団法人母子衛生研究会．わが国の母子保健．東京：母子保健事業団，1998; 25-27.
4) 柏熊路子．現代青少年の性の問題をめぐって．思春期学 1995; 13(2): 135-140.
5) 北村邦夫．若者達の性行動と避妊―オープンハウスでの経験を通じて―．産婦人科治療 1992; 65(2): 181-185.
6) 工藤照子，坂本知巳．子ども達との“ずれ”を再点検しよう―少年補導，相談窓口から―．産婦人科の世界 1995; 47(10): 31-34 .
7) 名取道也．思春期をめぐる性と指導．産婦人科治療 1989; 59(6): 686-689.

8) 田能村祐麒．学図ライトブック性教育シリーズ①学校における性教育．東京図書，1994; 66.
9) 久野孝子，衛藤　隆，小林正子，他．高校生の性に関する意思決定とアイデンティティとの関係．学校保健研究 1999; 41: 309-319.
10) 川畑徹朗，西岡伸紀，島井哲志，他．ライフスキルと生活習慣との関係に関する縦断的研究(1)—セルフエスティームと生活習慣—．第44回日本学校保健学会講演集 1997; 39, Suppl.: 274-275.
11) 川畑徹朗，西岡伸紀，島井哲志，他．ライフスキルと生活習慣との関係に関する縦断的研究(2)—初年度と第2年度の調査結果の比較を中心として—．第45回日本学校保健学会講演集 1998; 40, Suppl.: 238-239.
12) 春木　敏，川畑徹朗，近森けいこ，他．ライフスキルと生活習慣との関係に関する縦断的研究(3)—小学生高学年と中学生の食生活習慣の推移—．第46回日本学校保健学会講演集 1999; 41, Suppl.: 570-571.
13) 春木　敏，川畑徹朗，近森けいこ，他．ライフスキルと生活習慣との関係に関する縦断的研究(4)—小学生高学年と中学生の食生活習慣とライフスキルの関連—．第46回日本学校保健学会講演集 1999; 41, Suppl.: 572-573.
14) 近森けいこ，川畑徹朗，春木　敏，他．ライフスキルと生活習慣との関係に関する縦断的研究(5)—運動習慣とライフスキル—．第46回日本学校保健学会講演集 1999; 41, Suppl.: 574-575.
15) 近森けいこ，川畑徹朗，春木　敏，他．ライフスキルと生活習慣との関係に関する縦断的研究(6)—小学4年から中学1年にかけての運動習慣とライフスキル—．第47回日本学校保健学会講演集 2000; 42, Suppl.: 260-261.
16) 下山晴彦．大学生のモラトリアムの下位分類の研究—アイデンティティの発達との関連で—．教育心理学研究 1992; 40(2): 121-129.
17) 星野命．感情の心理と教育（二）．児童心理 1970; 24: 1264-1283.
18) SAS Institute Inc. SAS Language Reference Version 6. Cary. NC, 1990.
19) 菅佐和子．大学生のSelf-Esteemについての実証的研究(1)．愛知医科大学医学会雑誌 1980; 8(1): 77-82.
20) 前上里直，大津一義，柳田美子，他．セルフエスティームと生活習慣との関連—大学生を中心として—．第43回日本学校保健学会講演集 1996; 38, Suppl.: 360-361.
21) 柴田利男，野辺地正之．青年期における身体満足度と自尊感情の関連性．日本心理学会第54回発表論文集 1990: 68.
22) Ferrin H. H. A multi-instrument analysis of two aspects of the self-concept: Identity and self-esteem. Dissertation Abstracts International 1988; 48(8-B): 2454.
23) Takagi H., Fukumori Y., Ogawa K. Relations of the ego identity status with interpersonal relationships, the way of life, and the self-esteem in college women. International Society for the study of Behavioral Development IX Biennial Meetings 1987; 227.
24) Preisser G. Adolescent prosocial behaviors in relation to empathy, identity and self-esteem. Dissertation Abstracts International 1990; 51(5-A): 1555-1556.
25) 松本清一，石浜淳美，江川義雄，他．産婦人科小児・思春期問題委員会報告（わが国における思春期妊娠）．日産婦誌 1980; 32(10): 1733-1742.
26) 中山徹也，佐藤恒治，渡辺英二，他．小児・思春期問題委員会報告（わが国における思春期妊娠第2回調査報告）．日産婦誌 1985; 37(9): 1977-6987.
27) 玉田太朗，佐藤恒治，片桐清一，他．小児・思春期問題委員会報告（わが国における思春期妊娠第3回調査報告）．日産婦誌 1990; 42(4): 399-408.
28) 安沢菊江，田村千鶴．現代青年の性意識・性行動に関する実態調査—東北地方の大学生と関東地方の大学生の比較から—．思春期学 1989; 7(3): 256-262.
29) 町浦美智子．社会的な視点からみた十代妊娠—十代妊婦への面接調査から—．母性衛生 2000; 41(1): 24-31.
30) Rosenstock, I.M. Histrical origins of the Health Belief Model. Health Education Monographs 1974a; 2(4): 328-335.
31) Rosenstock, I.M. The Health Belief Model and preventive health behavior. Health Education Monographs 1974b; 2(4): 354-386.
32) 神馬征峰，岩永俊博，松野朝之，他(訳)．教育・組織診断：健康関連行動と環境に影響する要因，ヘルスプロモーションPRECEDE-PROCEEDモデルによる活動の展開，東京：医学書院，2000; 171-210.
33) 原田美奈子，天野瑞枝，福田峰子，他．看護婦の自尊感情とコーピング行動との関連に関する検討．日本看護研究学会雑誌 1997; 20(3): 286.
34) 菅野久美子，米沢久子，瀬戸奈穂美，他．看護学生の自尊感情の変化—臨地実習生の実習前後のSE比較及び満足感との関係—．日本看護学会28回集録（看護教育） 1997: 129-131.

THE RELATIONSHIPS AMONG SELF-IDENTITY, SELF-ESTEEM AND ATTITUDE TOWARDS SEXUAL BEHAVIOR IN UNIVERSITY STUDENTS

Takako KUNO*, Etsuko TACHI*, Akihiko OGASAWARA*,
Hiroshi SHIMOKATA[2]*, and Yoko YAMAGUCHI*

Key words : sex education, self-identity, self-esteem, university students

Purpose It has been reported that the young people of today tend to engage in sexual behavior at an early age and the abortion rate is high. The purpose of this study was to investigate the attitudes of post-adolescents with regard to sexual behaviors and the relationship to self-identity and self-esteem.

Methods The subjects were 234 males (mean ± SD 20.2 ± 1.1 years) and 460 females (mean ± SD 19.5 ± 1.1 years) 4-year university students aged 18 to 23 years in Aichi Prefecture. An anonymous, self-report questionnaire was used to survey the subjects with regard to self-identity ("Establishment of Self" scale), self-esteem (Rosenberg Self-Esteem Scale), and sexual attitude and behavior. The scores on both scales and subscales of the "Establishment of Self" scale, "Foundation of Identity (Foundation)" and "Establishment of Identity (Establishment)", were calculated and intercompared, along with sexual attitude and behavior, controlled for age and school type.

Results The mean total score of the "Establishment of Self" scale for males was 55.3 (SD9.2) and for females 52.2 (SD9.3), while those for the Rosenberg Self-Esteem Scale were 27.2 (SD5.5) and 25.7 (SD5.2), respectively. There was significant positive correlation all scales in both sexes.

Both male and female students had positive attitude towards sex and a negative view of "traditional gender roles" particularly females. Of the subjects, 82.4% of males and 69.5% of females were thinking of accepting a request for sexual intercourse from their partners. Many students understood the "need for contraception", that is a component of contraceptive behavior. Most of them, however, didn't acquire the other components. A total of 68.3% of males and 48.2% of females had experienced sexual intercourse during the last year. Of these, 50.6% of males and 58.2% of females consistently used contraception.

The score on the "Establishment of Self" scale was higher among both the male and female students who responded positively to having "communication ability," "learning ability," and "acquisition ability." Significant differences were found in total and "Establishment" scales among males, and all scales among females. The score on the Rosenberg Self-Esteem Scale was significantly higher with "learning ability" among males, and with "communication ability" and "learning ability" among females. However, no significant relationship was found between actual contraceptive behavior and any of the scales.

Conclusion In dealing with contraception, a gap exists between university students' attituds and actual behavior. The scores on the "Establishment of Self" scale and the Rosenberg Self-Esteem Scale were found to be significantly higher for those who exhibited higher values for components of contraceptive behavior.

* School of Nursing, Nagoya City University
[2]* Department of Epidemiology, National Institute for Longevity Sciences